

■ フランスから見る日本ジェンダー史

棚沢直子・中嶋公子〔編〕

学問や思想っていうものは、だいたい西欧の理論の上に成り立っている場合が多い。ジェンダー論もご多分にれれずであ

る。しかし歴史や文化が異なれば、

曖昧な共犯関係を相対化

男女や家族の關係にズレがあるのは当然だろう。

1999年に東京で、2000年にはパリで開かれた日仏女性研究シンポジウ

ムをもとに、十数本の論考で構成された本書には、進んだ西欧／遅れた日本という枠をはみ出す多彩な史的

事例が登場する。女神とさ

ら、平安／江戸の家の中

の妻や母の座、近代天皇

お、戦争のチアリーダーとしての銃後の女、そして現代の高学歴専業主婦。

私たちにはおなじみの話

も、フランス

から見れば

の「ありえない」であると

ころに、日本を相対化する

視点が生まれる。

古代から男女を明確に区

分したフランスに対し、日

本では単純な二項対立ではない曖昧な共犯関係が男女

の間に成立していた。

専門的な話が多く、読むのにちよいと難儀はするもの、ボーヴォワールの国に日本の女たちが乗り込んで、日本のジェンダー史の講演をする。当日のようすを伝える臨場感にあふれた

巻末の報告がおもしろい。
齋藤美奈子(文芸評論家)